

子どもに多いところから、「わらはやみ」と名づけられたとも、また、この病気の鬼を子どもとする唐の俗説に由来したからとも、さらには、ワラグ（瘰癧）病いで、ふるえにその特徴を見出したからとも、語源はこれらの他にも多様多彩である。今日、間欠熱の一種と考えられており、恐らくは、マラリアに似た熱病であろうとされている。悪寒・発熱が隔日、或いは毎日、時を定めておこる病いという。

瘧（おこり）、えやみと呼ばれることもある。

### 童わらは

この「わらはやみ」をもって、物語の主軸に据え、結構を志向した作品があった。その作品においては、子どもが「わらはやみ」を病むのではなく、十八歳の成人男子が罹病している。『源氏物語』「若紫」の巻は、源氏が「わらはやみ」を患い、いろいろ加持祈禱をこころみるが効がなく、人のすすめのままに北山の某寺を訪ね、聖の祈禱を受けるところから話が展開してゆく。

山の奥にわけ入った源氏は、年老いた聖が差し出した護符の紙を飲み、加持を授けられながら勤行につとめている。時あつて、聖の庵室から程近い、清げなる家屋にみとめた女兒こそ、十歳ばかりなる若紫であった。垣間見た少女は、髪を扇を広げたようにゆらゆらとさせ、泣き顔で、「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠ふせごの中に、籠こめたりつるものを」と、頑是ない可愛らしさである。奥深い山中で、雀の子

### 病やみ

と戯れる幼女の身の上を聞き知つた源氏は、そこはかたない悲しみがいや増してゆくのであった。やがては手許に引き寄せて後見をすることになる若紫に対して、源氏はおのれの運命と同じい、母を迅くに喪つた者どうしの、癒やしようなない悲哀を嗅ぎとつたのではなかつたか。

少なくとも源氏物語の「わらはやみ」とは、幼年時代のゆるぎない安らぎを喪失した、心の欠如感に連なる病いを潜伏させていたのではあるまいか。（み）